

5月15日(金) 「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」



先日、学校だよりで伊藤先生からお薦めの一冊の「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」を読みました。

主人公である「ぼく」は、父がアイルランド人で母が日本人。現在はイギリスにあるブライトンに住んでいる。中学校に進学する際に、近くにあった元底辺校(イギリスでは学力テスト等の結果から、中学校のランク付けができてしまっている。)を見学した際に自由な校風に惹かれ、それまでのカトリック系

の小学校から入学。そこでは毎日が事件の連続。人種差別丸出しの美少年、ジェンダーに悩むサッカー小僧、時には貧富の差でギスギスしたり、アイデンティティに悩んだりと思春期まった中の息子とパンクな母ちゃんの著者が共に考え悩み乗り越えていく。

今の日本の中学生でも、そろそろ世の中のこと、社会のことなどを本気で考えて、自分とは何か、どこへ自分が進もうとしているのか、そういったことを真剣に考えてみても良いのではないか、そう思いながらついついページをめくる手が早くなった。ぜひ、時間がある今だからこそこういう社会派の本を読んでもいいのではないだろうか。著者がある有名な人の言葉をかりて自分で付け加えた言葉が印象に残ったので紹介します。

「老人はすべてを信じる。中年はすべてを疑う。

若者はすべてを知っている。子どもはすべてにぶち当たる。」